

渡船の遭難

郷土史家 西 羽 晃

桑名から宮（熱田）への「七里の渡し」、佐屋への「三里の渡し」では、しばしば遭難事故があったと思われます。残っている史資料は極めて少ないですが、そのうちのいくつかを紹介します。

幕府の将軍の交代や琉球国王の交代にさいして、琉球から使節が江戸まで派遣されてきます。江戸時代の初めは東海道の桑名と宮を往来しました。寛文11（1671）年8月27日に使節の金武王子一行が江戸から帰る途中で、宮から4里ほど出たところで、暴風雨にあつて琉球人の乗った3隻のうち1隻のみ桑名へ着きましたが、2隻は知多半島へ流れ着き、その他49隻のうち5隻も知多半島に、1隻は勢州若松へ着きました。知多半島へ漂着したのは琉球人28人、付添の薩摩藩士83人でした。幸に死傷者はありませんでした。この事故があつたためか、のちに琉球使節は桑名を通らずに美濃路（垂井から宮）を通るようになりました。

延宝8（1680）年1月26日深夜に風が吹いてきました。伊勢参宮を済ませた一行が四日市から乗った船（63人乗り）船が、宮へ向かう途中に木曾岬付近で遭難しました。和泉新田の庄屋・富田家では早速に船を出して救助にあたり、村人の家に収容して、粥を提供し、衣服も着替えさせ、火にあたらせました。同乗していた4人の武士は富田宅で2、3日休養していました。

「7里の渡し」に較べて、「3里の渡し」は安全でしたが、水難事故はありました。安永2（1773）年1月9日に佐屋から15人乗りの船（2人水主）に18人（子どもが多かったが）が乗ってきました。加路戸新田付近で急な西風が吹いて船が揺れました。そのため乗客が騒ぎ立てたので、船が転覆してしまい、11人が溺死しました。このような水難事故の場合は出航した湊を管理する藩が事故の吟味に当たっています。この場合は佐屋から出航したので、尾張藩が吟味しています。船頭が祝儀をねだったので、乗客と

揉めたわけではないと船頭は弁明しています。船頭の言い分が正しいのか不明ですが、佐屋船では祝儀を出すのは普通でした。

寛政2（1790）年2月17日に七里の渡しの渡船が遭難して亡くなった人たちの供養墓が桑名市新町の光明寺にあります。かなり傷んでおり、頭部は新しくなっています。この時は桑名から宮へ渡る船（5人水主）で、桑名を出航して1里半ほど出た沖合で俄かに東風が吹き荒れ遭難しました。乗客30人余りのうち第1報では5人が死亡、18人が行方不明となり、荷物のうち4個が流失したと報じています。赤須賀の漁船が救助に当たりました。



光明寺にある七里の渡し遭難供養墓

遭難とは言えないかもしれませんが、皇女和宮は明治2（1869）年東京から京都へ行く途中に、1月29日朝、尾張藩提供の船で宮を出航しますが、引潮のため途中で座礁してしまいます。尾張藩では昼食弁当の差し入れをしました。4時間ほど待つて満潮になり船が動き、夕方に桑名に着いています。